

蔵出しお宝ニュース

— 第 42 号 —

三原市歴史民俗資料館では、所蔵資料の本格的な整理・展示のリニューアルに取り組んでいます。本紙では、資料館内で長らく眠っていた三原市ゆかりの貴重な資料の解説と行事の案内・紹介などを随時行って参ります。

刀剣手入れ講座を開催します

平成 26 年 10 月 11 日 (土) 13:30 から 15:00 まで、資料館 1 階ロビーにて文化講座「刀剣手入れ講座」を開催します。

三原地方は鎌倉時代末期から江戸時代初期にかけて、^{みほらもの}三原物と呼ばれる刀剣の一大生産地でした。三原物に関しては裏側の資料館マメ知識で紹介いたします。

現代において刀剣類は「武器」ではなく「日本が誇る美術品・工芸品」です。よって現在は各県の教育委員会が登録証を発行し、保存・継承されています。



その一方で、家の代替わりなどで刀剣類の手入れがされないまま保存されていることも多くあります。刀剣類は錆が大敵ですので、定期的に行います。専門の道具が揃っていれば、時間をそれほどかけずに手入れができます。

手入れ道具や教材などは、資料館でご用意いたします。なお、事故防止のため、刀剣類の持ち込みはご遠慮願います。

定員は 15 名（申し込み先着順）で、参加費は無料です。参加希望の方は三原市教育委員会 文化課（TEL 0848-64-9234・FAX 0848-67-5912）までお申し込みください。

この講座を通して日本が誇る刀剣の美と、手入れ・保存方法についての一端を身近に感じていただきたいと思います。



(左上) 刀剣類の手入れ道具

(左下) 手入れの一場面

資料館マメ知識 「三原物」とは？ 其の1

平安時代後期以降、^{やまとのくに}大和国・^{やましろのくに}山城国・^{びぜん}備前国・^{さがみのくに}相模国・^{みのくに}美濃国の5か国には多くの刀鍛冶が現れ、繁栄しました。それぞれ作風に個性があり、^{ごかてん}五箇伝と呼びます。中国山地は砂鉄の豊富な花崗岩地帯が広がっており、日本刀の材料となる良質の玉鋼が入手しやすい環境にありました。

備後国の刀鍛冶は、鎌倉時代末期までさかのぼる^{こくぶんじすけに}国分寺助国と、^{まさいえ}正家を祖とする三原物があります。三原物は刀剣の需要増加に伴って分派したと言われていています。備後国は古くから大和諸大寺の荘園であった関係から、三原物は大和鍛冶の影響を多く受け、^{しのぎ}鎚高く^{すぐは}直刃出来の作品が多いです。



短刀 銘 備州三原住正直作
附 黒蠟色塗短刀拵 (個人蔵)

鎌倉時代から南北朝時代の作品を古^こ三原、室町時代初期から中期までを三原(中三原とも言います)、それ以降の作品を末^{すえ}三原と呼びます。なお、銘に「三原」と入れるのは室町時代になってからです。

江戸時代に山田浅右衛門が寛政9年(1797)に記した『^{かいほうけんじやく}懷宝剣尺』の^{わざものひょう}業物表を見ますと、^{さいじょう}最上大^{おおわざもの}業物の刀工13名の中に応永頃(1400年代初頭)の正家の名があります。ただしこれは美術的な評価ではなく、浅右衛門自身の試し斬りによる、いかに「折れず・曲がらず・よく斬れる」かというもので、切れ味で言えば最高の評価を得ています。

古くは応仁の乱〔応仁元年(1467)～文明9年(1477)〕で三原物はよく斬れるということが評判になり、全国に三原の名が知れ渡ったようです。「折れず・曲がらず・よく斬れる」刀ということは、相当な修行をした刀工であったことと、上質の水を使用していたことの証明です。三原地方は酒造業も古くから盛んで、江戸時代の^{みほらざけ}三原酒は広島藩から將軍家への献上酒、日光献上酒として珍重されました。これは地下に流れる水が大変良質であることを物語っています。

※以下、次号へ続く。

おき どこ しゆん じゆう 置 床 春 秋



掛物 堀田 翠峰 筆 郭子儀 図

堀田翠峰は尾道ゆかりの人物です。

花入 魚籠 花 季のもの

発行 平成 26 (2014) 年 9 月 25 日
〒723-0015 三原市円一町二丁目3番2号
三原市歴史民俗資料館
TEL 0848-62-5595

※本冊子に掲載の写真などは、許可なく転用なされないようお願い申し上げます。